

川越宣言

第 42 回全国町並みゼミは、蔵の町並みで知られる埼玉県川越市を会場に、全国から約 450 名が集まり、「歴史都市のこれから～過去に学び、今を見つめ、未来を想い、共に歩む」をテーマに、2020 年 1 月 31 日（金）、2 月 1 日（土）の二日間にわたり開催された。川越での全国町並みゼミは、1993 年に第 16 回大会を行って以来、四半世紀ぶりの開催である。その後、1999 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、多くの観光客が押し寄せるようになった。2018 年には、町並みを自主管理してきた町並み委員会が 30 周年を迎えた。しかし、デザインの誘導ではなお模索が続いており、特に伝建地区外で失われる伝統的建物が後をたたない。

今回は、今後町並みゼミを開催する地元団体の負担を軽減するため、一泊二日のプログラムを試行した。代わりに、前日、東京谷中において「プレイベント in 谷中：谷中をとおして最先端の歴史まちづくりを考える」を開催、「谷中を伝建地区に」を掲げた「たいとう歴史都市研究会」の協力を得て、見学会とトークセッションを行なった。

ゼミ 1 日目は昼に集合、6 つの分科会ごとに、それぞれのテーマにあわせたまち歩きとパネルディスカッションを行なった。第 1 分科会「歴史的都市環境（Historic Urban Landscape = HUL）をどうするか？」は、前日のプレイベントから連なるテーマで、伝建地区になりきれない歴史的環境をどう保全するか、伝建地区の外に広がる歴史的環境をいかに保全するか、望ましい制度的枠組みについて討議・構想した。伝建地区の間口を拡大するのか、文化的景観を拡充するのか、両者を組み合わせるのか、専門家間で火花が散った。

第 2 分科会「町並みはみんなでつくる」は、川越の町並み委員会などで実践されている、住民による町並みの自主的マネジメントがテーマであった。パネラーたちは、その成立のためには、住民同士がまつりやワークショップを通して町並みの価値を共有していく不断のコミュニケーションが欠かせないことを口々に指摘した。第 3 分科会「景観まちづくりがもたらしたもの」では、オーバーツーリズムや、町並みへのマンションやホテルの進出を背景に、住民と来街者の良好なあり方を討議した。「京町家の保全及び継承に関する条例」を定めた京都からは強制力をもたない規制がうまく働いていないという報告があり、地域コミュニティの利益を最大化するよう、いっそう強力な方策をとる必要性が確認された。

第 4 分科会「伝統的な技と心の継承・育成」では、さまざまな職業のパネリストたちが、歴史的な町並みや建物を次世代に引き継ぐ実践について報告、ホンモノや地域の魅力を、楽しく持続的に伝えることが共通のポイントとして浮かび上がった。第 5 分科会「魅力的な建物を使いこなそう」では、各地で伝統的な建物の活用に取り組む 30 代、40 代の第二世代たちが、自分のライフスタイルを実現したいという欲求こそ原動力と語りあった。第

6分科「地域物件の個性を活かす編集力とエリアマネジメント実践ワークショップ」では、参加者がそれぞれ空き家物件を持ち寄り、どのように所有者の理解を得て行くかなどの方法を学んだ。

開会式は2日目に行った。引き続き行われた陣内秀信・法政大学教授の基調講演「歴史都市を活かしたまちづくり：イタリアとの比較とこれからの日本・川越」では、歴史的都市の再生が劇的に進むイタリアの豊富な事例を通して、日本との多くの共通点を指摘するとともに、日本の町並みでも、商業施設としてだけでなく、よりクリエイティブな活用を進めること、周辺農村との連携が肝であると喝破した。

町並みゼミ名物・各地からの報告では、新会員である台湾歴史資源経理学会を含め、12事例が報告された。真壁、竹富、鞆の浦など重伝建地区からの報告とともに、新潟、小諸、奈良まち、白杵、行田、小川町、引田など必ずしも重伝建地区に指定されていない歴史都市で、さまざまな活動が取り組まれていることが報告され、歴史都市全体を保全するより確実な枠組みの必要性が痛感された。

私たちは、この四半世紀に川越が実現してきたまちづくりに、たくさんの人々が訪れていることに目を見張り、私たちの町並み運動の確かさを確認した。同時に、重伝建地区の内外に、歴史的資源の滅失など多くの課題があり、運動の手を決して緩めてはならないことも確認した。この認識のもとに、これからも知力と想像力を尽くして町並み運動に取り組む決意を新たに、右宣言する。

2020年2月1日

第42回全国町並みゼミ川越大会参加者一同